

日英表現比較考 (I)

—「英語らしい表現」への一考察—

小林 永 二*

A Comparative Study of Expressions between English and Japanese
— in search of 'Englishness' —

Eiji KOBAYASHI*

はじめに

世界には現在、三千とも四千とも言われる大きな数の異なった言語が存在するものと思われる。勿論、その分類の仕方によっては、多少の増減も有り得ようが、とにかく、この地球上の諸民族・諸部族が、日々何らかの多種多様な言語を用いて、相互に communication を行なって暮らしている事実は否めないところだ。

例えば、ソ連や中国、更にはインド等も含めて、これらの諸国は、謂ゆる多言語国家 (Multilingual countries) の典型例であろう。

その逆に、日本や朝鮮などは、典型的な単一言語国家 (Monolingual countries) と言える。

この外、multilingual とまでは行かないが、二ヶ国語常用 (Bilingual) の国としては、英語とフランス語を併用するカナダや、南部でワロン語、北部でフラマン語を使用するベルギーや、英語と Afrikaans を使用する南ア連邦、更に三ヶ国語常用 (Trilingual) 例としては、Sri Lanka が、Sinhalese, Tamil, English の三ヶ国語を用いており、それ以上の例としては、Singapore は、English, Mandarin, Tamil, Malay の四ヶ国語、Switzerland も、German, French, Italian それに極く一部 Romanic が用いられている。

斯くの如く、global な規模で見れば、単一言語国家はその数に於いて、内部で二、三の異なった言語が常用されている国より遙に劣る。我々単一言語国家に住む日本人などは、普段あまり外国語等を意識することはない。精々英語を学習する時位が外国語に接触する (それも直接的にはなく、あくまでも間接的にしか過ぎないが) 唯一の機会であろう。

しかしその様な僅かな外国語との間接的な接触であっても、英語がどこか日本語とは異なる (当たり前と言ってしまうとそれまでだが) と言う実感を万人がその学習を通して抱く筈である。

ここで、「異なる」と言う意味には説明が必要である。つまり英語が日本語と「異なる」と言った場合、音声アクセント、音韻・音節構造から始まって、統語法 (syntax)、形態

* 英語英文学研究室 (昭和60年9月19日受理)

変化 (morphology) 更には修辞法 (rhetoric) に到るまで種々の面での捉え方がある。ここで、用いられる文字の違いについては言うまでもあるまい。とにかく英語と日本語とが何らかの意味合いで「異なる」のだとすれば、それは逆に言えば、それぞれの言語が、それぞれ固有の、他とは異なった、一際目立つ特徴なり、個性なりを有する事実を証するのではなろうか。然りとすれば、我々は各言語にそれぞれ、「～らしき」と言った特性を上述の種々の意味合いで認めてもよいのではないか。つまり、英語には、「英語らしき」、日本語には、「日本語らしき」、中国語には、「中国語らしき」と言った具合である。

例えば、「ゴドブザデ」なるコトバを聴いて、これを日本語であると考える様な日本人は恐らく一人も居るまい。勿論、この場合、その単語の意味が不明である故を以って、これが日本語ではないと判断することもあろうが、それ以前の問題として、そもそも音声的な面からして、濁音が五つも連続して現われる単語など日本語である筈はないとの判断が、聴覚を通して無意識の中に働らく為ではなからうか。

つまり、「ゴドブザデ」のような五連濁音などは、日本語の音韻体系に馴染まぬわけのもので、その意味で正にこれは、「日本語らしくない」のである。因みに「ゴドブザデ」とは、かつてのイランの外相の名前であったように記憶している。斯く言う筆者にも、テヘラン在住のイラン人の友人が居るのだが、付き合い出して既に二、三年にもなるのだが、未だに彼の family name を聴き取れないし、況してや自分で発音など為し得ず、不自由極まりなく、已なく first name だけでいつも済ませている始末である。

日本語や朝鮮語等の音韻体系には、語頭に r 音が来ないとか、更に子音群も来ないし、語尾は、特に日本語の場合は殆どが母音終りの開音節である等の特徴が、その音声面で指摘し得るわけで、当然、そこより日本語らしい音や、朝鮮語らしい音などが有り得るわけである。日本語と朝鮮語は、色々な点で類似の性格を共有するわけだが、それでも、音声面で若干の相異が存し、例えば、朝鮮語では、有声音 [b], [d], [g], [dʒ] 等は語頭に来ない。しかし、日本語では、これらの濁音は語頭に立ち得る。(但し、本来の固有の大和コトバは、濁音は語頭に立たず、その唯一の例外としては、onomatopoeia が挙げられよう) これはほんの一例に過ぎないが、やはり発音の面で、「日本語らしき」や「朝鮮語らしき」は厳存する。

さて話しが少し横道にそれて来たようなので、この辺りで、本筋に戻りたいのだが、つまり我々は各言語には、音声面でも、統語面でも、その他諸々の言語現象に於いて、それぞれが、その「～らしき」なる個性なり、その当該語に特有の性格を有する事実を確認した。その前提に立って、ここでは英語と言う一言語を採り上げ、謂ゆる「英語らしき」とは如何なるものであるかを考察してみたく思うのである。先述もした如く、一口に「英語らしき」と言っても、種々の面からの捉え方が可能なわけのもので、従って当然にも、ここでは焦点を絞らざるを得ず、音声面からのそれは、このような「書き物」に馴染みにくいこともあり割愛させて頂くことにして、ここでは主として、広く表現一般 (phraseology)、統語法 (syntax) 更に修辞法 (rhetoric) 等の面から、「英語らしき」なる特徴に approach を試みたい。その際、やはり当然にも、日本語との対比を通して考察を加えるのが妥当であろうし、その意味では、「日本語らしき」についても言及せざるを得ないであろう。日本語と英語とは、その語族・語系を全く異にする言語であり、その意味では、比較的その特徴が際立って居り、当小論文の目的に馴染み易くもある。それでは、上述の諸事実を頭に置きながら、以下に「英語らしい表現」について若干の考察を進めて行きたい。

I. 言語に於ける「らしさ」とは何か

先ず最初に或る特定言語の謂ゆる「らしさ」を述べる際に頭に入れておかねばならぬ事實は、それはあくまでも相対的な概念であると言うことである。他の言語との比較なしに、或る言語の「らしさ」について語る事は出来ない。例えば、日本語で、「私はお腹が空いています」と言う表現があるが、これに対するドイツ語の表現として、**Ich habe Hunger.** なり、**Es hungert mich.** なる表現を当てはめて比較してみるに、日本語から見たそれら独文は如何にも「ドイツ語らしさ」に充ちた表現と言い得る。つまり独文の方は、例の「S+V+O」文型の他動詞構文であり、前者のそれは、名詞 **Hunger** に意味上の *prominence* を持たせた謂ゆる「名詞構文」であり、後者のそれは、謂ゆる非人称の **Es** が生理現象を表わすのに用いられた例であり、このような非人称構文などは、そもそも日本文には存在しない、従って日本人などには最も馴染みにくい構文と言えるもので、逆にその意味では「ドイツ語らしい」構文だと言えるわけである。「私には見当がつかない」なる和文も、ドイツ語では、やはり「S+V+O」文型をとって、**Ich habe keine Vorstellung.** の如く表現される。しかし、日本語から見ての謂ゆる「ドイツ語らしさ」も、これを例えば、英語やフランス語更には中国語等の観点から見れば、必ずしも同様に映るとは限らぬわけで、それぞれ比較される言語の種類に応じて、その当該言語の「らしさ」にも多様な差異が見られる筈のものである。以下に少し実例を見て見よう。

実例 I. (和文) どうぞお坐り下さい。

(中文) 請坐!

(独文) **Bitte setzen Sie sich!**

この場合の和文と中文の表現形式は類似していると言えよう。つまりどちらも自動詞を用いて表現されている。それに比し、独文のそれは、やはり和文や中文の表現とは明らかに異なっている。つまり独文では、例の再帰動詞が用いられ、その目的語として再帰代名詞 **sich** が使われている。この再帰用法 (*reflective use*) が動詞の一部に存在するのは、西欧語にあって、日本語などには見られない一つの大きな特徴と言えよう。普通一般に英語で上例の意を表わすのに、**Please sit down.** なり **Sit down, please,** と言うのは、誰れでも知っているが、そしてこの場合は、ドイツ語の表現よりも、英語でありながら、むしろ和文や中文の表現の方に近い。しかし実は、英語にもやはりドイツ語と同様に、再帰動詞 **seat** を用いた表現がないわけではなく、少し格式ばった (*formal*) 場面では、**Please seat yourself.** なり、**Seat yourself, please.** などとも言うことがある。更に再帰代名詞 **yourself** を用いないで、**Please be seated.** や **Be seated, please.** などと受身形で言う場合の方が多い。いずれにせよ、これらの場合では、英語に於いても、ドイツ語同様、再帰用法としての他動詞が用いられている。

ところで、この再帰用法 (*reflective use*) なるものは、その名の示す如く、或る動作が、その動作主に反射的に帰ってくるものであって、これを態 (*voice*) の面から見ると、能動態 (*active voice*) と受動態 (*passive voice*) の丁度中間に位置するものであるとも考えられる。英語などに比し、ドイツ語に於いては、先述の **Bitte setzen Sie sich!** の例にも見る如く、この再帰用法は特に顕著に散見され得るようである。一方、この再帰用法も、時によっては、その目的語となる再帰代名詞 (ドイツ語の場合では、**sich** であり、英語の場合では、**oneself** や **itself** 等) を特に伴うことなく、そのまま普通の他動詞としても使用可能である。又それとは逆に、一般の他動詞も場合に応じて再帰代名詞をとっ

て、再帰用法 (reflective use) に用いられることも可能である。いずれにせよ、この動詞の持ち得る「再帰用法」なるものが、西欧語、その中でも、特にドイツ語などに極めて特徴的な構文法を成立せしめるものであって、普段自動詞構文や、無主語文 (特に、この場合、代名詞主語文が日本語に少いことを想起されたい。否、主格の代名詞に限らず、代名詞そのものの使用が少いことが、そもそも和文の特徴とも言い得る) に馴れきった我々日本人にとっては、新鮮であると共に、如何にも異質な表現形式と映ることは否めないところである。

実例Ⅰ. (和文) **あの本は読み終わりましたか。 いゝえ、まだです。**

(中文) **那本書看完了嗎？ 沒有。**

(英文) **Have you read the book yet? Not yet.**

この場合では、和文と中文の構文法は類似のもので、状況中心の説明文であることや、例えば、この中文では「那本書」を主題として取り出した表現で、那本書你看完了嗎？ 又は、你那本書看完了嗎？ の文型から「你」を省略した形と思えばよい。それに対して、英文では、you なる人間を主語として取り、read と言う他動詞を用いて、「S+V+O」文型を構成しており、和文や中文の構文法とは明らかに異なる。

斯様にして、巷間言われる中文と英文の文法的類似、特にその語順の「S+V+O」文型に見る様な構文法も、現実の具体的な個々の表現や文例については、常に必ずしも中文に於いて、「S+V+O」文型を期待し得るわけではなく、むしろこの例に見る如く、日本語の構文法に類似の場合も数多く中文に散見されるのである。勿論、中文に英文と同様の「S+V+O」文型の見られるは否定し得べくもない事実ではあるが、英文の場合とは異なって、それが中文に於ける基本文型であるとは容易に断定は為し難いのである。

実例Ⅱ. (和文) **晩御飯はお食べになりましたか。**

(中文) **晚飯吃了嗎？**

(英文) **Have you eaten dinner yet?**

この場合、和文から見た中文は、特に「中国語らしい文章」とは思えない。何の異和感もなく、素直に日本人にも受け入れられる文章表現である。つまり、ここでは、和文と中文は同じ構文法に基付いて文章表現が為されているからに外ならない。ところが、仮りにこの中文を、英文の側から眺めると、非常に「中国語らしい文章」と映るのではないか。つまり、英文には、この場合の中文のような構文法が存在しないが故である。同じ中文でありながら、和文と英文とからではその評価に大きな差異の存する所以である。

今一例見てみよう。

実例Ⅲ. (和文) **象は鼻が長い。**

(中文) **象鼻子很長。**

(独文) **Der Elefant hat einen Rüssel.**

(英文) **The elephant has a trunk.**

この例題の場合、和文や中文から見た独文は、如何にも「ドイツ語らしい」文章に映る。やはり「S+V+O」文型の他動詞構文の故であろう。日本語の動詞はその九割方が自動詞から成り、自他の区別の明確な、「主客の対立」を結び付ける他動詞を用いた構文法は、一般に日本文には馴染まないことは夙に知られた常識である。更にこの一見「ドイツ語らしい」文章も、これを英文の側から見れば、何の変哲もない普通の文章にしか映らない。つまり、この場合、英文の表現も「S+V+O」文型の他動詞構文であり、独文の主語も動詞も目的語も、英文のそれらと見事な照応ぶりを見せている。従って英米人からは、こ

の独文の表現には何らの異和感もなく、これが我々日本人の言う様な、極めて「ドイツ語らしい」文章だなどの意識は全く有り得ない。

ところで話は少し変るが、特定言語の謂ゆる「らしさ」と言っても、その言語が、例えば日本語のような混種語 (hybrid) の場合には事情は若干複雑である。今では全く日本語化して使われている、例のステュワーデス (stewardess) なる語も、どうやら正式の場合には、漢語を用いて「客室乗務員」と呼ぶそうである。因みに中国語では stewardess は、「**飛機女服務員**」となるが、日本製漢語と本元の中国語の表現との微妙な差異は興味深い。カタカナ外来語の多用にとかく批判の多い昨今だが、何でも漢語で置き換えることが「日本語らしさ」を守る方策であるなどとは筆者などは考えない。この場合などは、例えば stewardess をそのまま用いた方がむしろ「日本語らしい」とも言える。千数百年に亘る漢語使用も所詮は「水と油」のその如く、どうも漢語は日本語には馴染まぬようだ。何のために「ステュワーデス」と「客室乗務員」の double standard が存在するのか、一度関係者に訊いてみたいものだ。

ところで話を元に戻すが、筆者も色々の機会に、これまで幾度となく述べてきた、例の英語に於ける「名詞表現」なども、日本語の観点からは、新鮮だが馴染みにくい表現の一つになるわけのものだが、独語や仏語などの観点からは、それらはなにも「英語らしい表現」として特に際立つ存在ではなく、極く当り前の表現に過ぎないと言うことになるのである。独語で、**Gute Besserung!** は、病人の全快を祈り、「お大事に！」の意だが、更に

似た例に、話している相手などが、急にクシャミをした時などに、ドイツ語で、**Gesundheit!** (お気をつけて!) などと言うが、これはドイツ語では元々「健康」を意味する名詞であるが、日本語でこのような名詞表現は考え難い。フランス語で、「頑張れよ! しっかりやれ!」の意で、**Courage!** や **Bon courage!** などと言うが、これも、「勇氣」を意味する名詞の courage がそのまま用いられている。実はこのところは、英語でも、そのままフランス語から来た courage を用いて、**Courage!** 「しっかりやれ! 頑張れよ!」を使っている。**Bon voyage!** 「航海の御無事をお祈りしています」や、**Bon appétit!** 「大いにお召上り下さい」などのフランス語の「名詞表現」はそのまま英語でも使われている。ドイツ語の **Glückliche Reise!** や、**Guten Appetit!** なども上例と同義の「名詞表現」と言える。英語に「さよなら!」を意味する **Good day!** なる表現があるが (この場合は Good の方に stress が置かれるようである)、ドイツ語でも少し改まった、formal な表現として同様に、**Guten Tag!** があり、フランス語には、**Bonjour!** があるが、いずれも日本語などには見受けられぬ「名詞表現」である。「驚き」・「意外」などの意を表わす感情表現も、英独仏語に共通の名詞表現が使われている。即ち、英語の **My God!** であり、独語の **Mein Gott!** 仏語の **Mon Dieu!** がそれである。いずれも、「オヤマア! これは大変! へえっ! あゝ困ったな!」などの意を表わすが、場合によっては「悲しみ」や「怒り」の感情を表わす間投詞として「怪しからん!」の意となる。「皆様の御健康を祝して、乾杯!」などと日本語で言うことがあるが、これなども英語では、**Your health!** なり、先程も出たドイツ語からの **Gesundheit!** などの「名詞表現」が使われるようである。

Spoken English で、「怒り・感嘆・誓言・強調」などの意を表わすのに、**Thunder!** 「まあ、いまいましい! 畜生! 等」と言う語 (原意は「雷」) があるが、ドイツ語でも同様に、**Donner und Doria!** や **Donner noch mal!** などの表現があるが、やはり Donner (原意は「雷」) なる名詞が間投詞として用いられている。フランス語にも、名詞を一種の間投詞的な挨拶語のように用いた例は数多く見出されるようである。その場合は、形容詞

の *bon* 又は *bonne* を伴う場合が多い。*bon* を伴う場合は前述もしたので、ここでは、特に *bonne* を伴う場合の例を若干挙げておこう。**Bonne fête!**「楽しいお祭りを!」、**Bonne chance!**「幸運を祈る! うんととってきたまえ!(ハンターなどに向かって狐の前に言う)」、**Bonne journée!**「楽しい一日を!」、**Bonne soirée!**「楽しい一夜を!」等がその例であるが、それらの日本語訳の方は、何とも、ぎこちなく落着かないのは、日本語の場合では、そのような挨拶語なり、言い回しなりが、そもそも存在しないからではないか。とってつけたような訳語を与えてみても、しっくりいかないのは当然かも知れない。

以上見てきた如く、英・独・仏語などの欧州系の言語では、例えば「名詞表現」などが共通項のような存在としてあり得るわけだから、相互に違和感はないのであろうが、日本語のような言語しか知らぬ者にとって、上例のような「名詞表現」は、やはり馴染みにくい、奇異な表現と映るのではないか。人に何か頼まれた時に、「承知致しました」とか「はい、わかりました」などの意で、ドイツ語で、**In Ordnung.** と言うが、これなども、やはり「名詞表現」が用いられている。

“**Hello, Japanese!**”「ヤァ、日本人達!」これは香港大学に留学中のオーストラリアからの女子学生が日本の某テレビ局の取材に応じて、日本国民に挨拶のコトバとして呼びかけたものだが、このように直截にして、こだわりのない、くだけた「物言い」の様態に馴れていない日本人には、このように呼びかけられても戸惑うばかりだ。恐らく同様にして、“**Hello, Koreans!**” などと呼びかけられたら、韓国人ないしは朝鮮人達も日本人同様戸惑いを感じる筈だ。しかし中国人なら、“**Hello, Chinese!**” と挨拶されても、日本人や朝鮮人ほどの戸惑いは恐らく感じることはあるまい。何故ならば中国人の「物言い」の様態は、日本語や朝鮮語に於ける如き複雑多岐に亘る体系的な敬語や敬意表現を欠いており、その点英語の「物言い」の様態と一脈通ずるところがある故である。

ところで、これまでは或る特定の内容を持った事柄をA言語ではどの様に表現し、B言語ではどの様に異なるかを瞥見したわけだが、実際には或るA言語の表現に対して、それに当るB言語の表現が存在しないと言った事実も有り得る。こうなるともはやA・B両言語の表現比較などと言う事自体不可能となる。これはつまり、或る特定の対話の *situation* に於いて、A言語では相応の発言が期待されるに比し、B言語では、その様な「場面・状況」では何らの発言も為されることがないと言ったケースである。斯様な事は実際にいくらでも起こり得るのであり、その場合、例えばA言語に於けるその様な発言は、やはり「A言語らしい」と言ってもよいものである。勿論、この場合、A言語とB言語を入れ替えても、同じ様な現象が異なった状況 (*situation*) で又同様に散見され得る筈である。

例えば、中国語に於いて、余程の特殊な立場に居る人達を除いて、老若男女を問わず、一般に人々が相互に見知らぬ者同志の間で相手を呼ぶのに、「同志」と言う呼称がある。これなどは考えて見れば誠に便利なもので、特に日本人の場合のように、男女の別、長幼の別、身分の上下関係、社会的地位の高低、更に公私の別や、親疎の度合等に応じて種々様々の呼称を使い分けねばならない立場に置かれている現状を鑑みれば羨しくさえある。英語に於いてさえもそのような呼称詞は存在しないと言えよう。日本人などの場合、実際、相手をどう呼べばよいのか戸惑うことの多いのは、お互い日常生活の中で体験するところである。仕方なしに、「エーッ」や「もしもし」、「ちょっと」その他「咳払い」で相手の注意を惹くことさえある。日本語に呼称詞が少ないと言うのではないが、不特定の場面・状況で臨機応変に即座に使えるものは少い。英語の呼称詞も、日本語などの場合に比し、遙

かに自由闊達に用い得るが、中国語の例えば「同志」などにはとても太刀打ち出来まい。

更に呼称詞と並んで、挨拶語がある。例えば日本語には、東洋の君主国として、礼儀を尊ぶ伝統があり、又諸種の儀礼が謂わば日常の日本人の生活の中に様式化（stylization）されて組込まれている現状に鑑みて、誠に多種多様の挨拶語があるものと思われる。

尤も、東洋の礼節を知るの本来本元は言うまでもなく中国である。従って、当然にも中国には数多くの挨拶語が存在するものと考えられる。

それでは、日本語と中国語に於ける挨拶語の様態にはどのような差異が存するのであろうか。一口に言えば、日本語の挨拶語は、TPOに応じて、極めて様式化された stereotype（紋切型）のものが多いのに比し、中国語の場合では、そのような「様式化された挨拶語」（stylized greetings）は少い。極端な言い方をすれば、中国人の場合は、各人が各様のコトバで必要に応じて挨拶を交わすのであって、日本人に於けるが如き、極めて型にはまった、紋切型の様式化された一律な挨拶の仕方はあまり見られないのである。例えば、今では日本人なら誰れでも知っている、例の「你好！」であるが、日本人は普通これを「今日は」位の日常よく取交わされる挨拶語のように軽く知人・友人、職場の同僚等、一般に誰とでも身近な人々の間で、日本語の「今日は」と同じ様に用いられるものと錯覚しているくらいが見受けられるようだが、これはとんでもない誤解である。実は中国の人達は、日本人が考えている程にはこの「你好！」は頻繁には用いないのである。これは日本人が考えるような軽いコトバではなくて、どちらかと言えば、もう少し重みのある formal な挨拶用語なのである。従って中国人は親しい者同志の間では、日常このような挨拶語は用いないと言ってよい。つまり先述もした如く、各人が各様の挨拶を必要に応じて自分のコトバで行なうのであって、日本人の場合のような一律の型にはまった挨拶はしないのである。

実はそのような言い方をすると、朝鮮語の挨拶用語についても全く同様の事が言い得るのである。朝鮮も礼節を知る国として、中国や日本にひけをとらない。当然にも数多くの挨拶用語が朝鮮語の中に見受けられる。一番日本人にも知られている挨拶用語として、例の「アンニョンハシムニカ」がある。日本で市販されているハンゲル語会話書によれば「今日は」or「今晚は」と訳されている。而してこれも中国語に於ける「你好！」の場合同様、色々の誤解を生じやすい。一口に言って、日本語の「今日は」or「今晚は」等の挨拶語の占める使用範囲は、朝鮮語の「アンニョンハシムニカ」や中国語の「你好！」よりも遙かに広いと言ってよい。これに比し、「アンニョンハシムニカ」（안녕하십니까?）や「你好」の使用範囲は日本人が普通考えるよりはずっと狭い。その代り、それらの間隙を埋める種々の多彩な表現が、謂わば挨拶語と言った固苦しい用語ではなく、もっと自由な各人各様の言い方が、朝鮮語や中国語の場合には見受けられるのである。日本語に比較的近いとされる朝鮮語や、かつては同文同種とまで言われた中国人のコトバである中国語できても、これだけの差異が日本語との間に見られるのだとしたら、西洋語たる英語やドイツ語と日本語の差異はもっと遙かに大きなものであらうと想像される。つまり、Good morning. や Guten Morgen. が日本語の「お早う」とほぼ一致して使用されるような場面・状況（situation）は日本人が考えるよりも、もっとずっと少いのではないかとの当然の疑問である。筆者はこれまでにこの事実に興味関心があって、それなりに色々の場合について調べて来たのだが、ここでその詳細について述べる余裕は残念乍らないわけだが、少な目に見積っても、日本語の「お早う」に当る英独両語の表現は数十種を越えると思えてよい。何故斯様な結果が生ずるのかの理由は、先述もした所だが、要するに日本人の「物

言い」が TPO に応じて型にはまった決まり文句が多く、極めて硬直的 (rigid) であるに比し、西洋人については言うまでもなく、中国人や朝鮮人に於いても、日本人のような「紋切型の発言」が見られず、つまりこれは、彼等にとって、例えば「挨拶」とは、あくまでも個人対個人の間で交わされるべきもので、日本人の場合の如く、止むなく儀礼上挨拶を交わす等のことが少く、更に日本人の場合、かなり親しい間柄の者同志でも、stereotype の挨拶語が用いられたりする。つまりこれらの事が原因して上述の差異となって現われてくるのであろう。これらはもはや言語の問題と言うより、文化の領域に属するものと言えよう。

或る特定言語の「らしさ」について考える際に、その言語を用いる集団の文化や社会、更に人間そのものにまで及んで考えて行かないと、その「らしさ」を構成する真の姿をつかみ得ない。しかも、その「らしさ」とは、あくまでも相対的な性質のものであり、更に比較の対象が異なれば、その「らしさ」の様態も変わり得るものである等々の事実をこれまでの考察を通じて我々は確認し得たのである。

そこでいよいよ次項に於いて、本小論文の main theme でもある「英語らしい表現」の具体的な様態について瞥見し、更に少しく考察を深めたいと思うのであるが、その際の「英語らしい表現」の意味するところは、これまで累々と述べ来たった如き意味合いの下に捉えられた「英語らしさ」であり、又「英語らしい表現」と言うものであることを再確認して置きたい。これをもっと平たく、解りやすく敷衍すれば、「英語らしい表現」とは、一口に言って日本語からは出来るだけ縁遠い、かけ離れた表現、我々日本人には見馴れない、それだけに馴染み難い表現と言えよう。

II. 「日英表現比較」各論省察

(1) 英語構文法の基本としての「S + V + O」文型

英語構文法の基本を為すものが、主語として動作者が立ち(勿論、この場合、或る action を起動するものは人間に限らず、無生物としての物や、抽象名詞等であっても構わない)、その動作を受けるものとして客語が存在する。而して、この「主語」と「客語」を結び付ける役割を担うものが「他動詞」である。ここより上述の謂ゆる「S + V + O」文型が英語構文法の根幹を為すものとして浮上して来るのである。

つまり英文の基本的発想では「主客の対立」を通して、自他の区別を明確にし、行為者とその action を受ける被動者とを、他動詞が間に介在してこれを結びつけるという型をとる場合が圧倒的に多く、この辺りに和文の発想や文型との大きな差異の見られるところである。

ところで和文の基本文型として、その述語部分を構成する用言(動詞・形容詞・形容動詞を指す)の種類により、大別して三つの型(「～はどうする」・「～はどうである」・「～は何だ」)に分けられる。問題は一見主格に立つやに見える助詞「は」は、格助詞「が」と異なり、本来は副助詞に属して居り、その働きや機能は、連用修飾語のそれである場合が多い。よく「が」は主語を表わし、「は」は主題を表わすなどの説明も聞くが、実際の「は」と「が」の区別や、その用法の微妙な違いについては、夙に国文法学界で論議されて来たところであり、今ここで又その論議を繰り返そうとは思わない。ただこの問題に関して興味深いことは、同じく助詞を用いる朝鮮語などにもこの区別が存在する事や、更に原則として、格助詞などの助詞そのものを用いない中国語などに於いて、それでは如何なる方法でこの「は」と「が」の区別に対応しているのであろうかを考える事や、更にこ

れを拡大して、日本語や中国語などとは全くその構文法を異にする英語に於いて、これらの区別は如何にして為されているのであろうか等々の課題が存する。

この事に関しては、やはりここで詳述する余裕はないが、筆者などが漠然としてではあるが、感触として、音声アクセント面でその区別を英語などでは行なっているのではないかとの節がある。音声アクセント面の機能・役割が **communication** の中で占める比率が日本語などより格段に優る英語に於て、そのような考え方は当然に出て来る筈のものなのである。中国語に於いても、そのような発想が若干出来なくもない。ただ、日本語とはほぼ同様の助詞を持つ朝鮮語については、日本語のそれと同様に考えてもよからう。しかしこれらの問題は、ここではこれ以上論じない。話しを元に戻して、早速、日本語で、上述の基本構文の多くが、英語では、「S+V+O」の文型で表わされている実例を見よう。

- (i) In most firms, they use English, but not Chinese. (大抵の商社で、英語は使
うが、中国語は使わない)
- (ii) Do you have an appointment? (約束はして居られるのですか)
- (iii) I have already made a reservation for my hotel. (ホテルはもう既に予約し
てあります)
- (iv) I don't need a car, but I want money. (車は要らないが、金は欲しい)
- (v) It has no use. (それは役に立たない)
- (vi) A week has seven days. (一週間は七日あります)
- (vii) He took a walk yesterday. (彼は昨日散歩した)
- (viii) You mean business? (君は本気なのか?)
- (ix) I have never read the book. (その本は読んだことがない)
- (x) Keep the change. (お釣りは要らないよ)
- (xi) I climb mountains, but I never do any swimming. (山は登るが、泳ぎは全
くしない)
- (xii) She has a horror of snakes. (彼女は蛇が大嫌いだ)

ところで、上述の日本語の基本文型を少しく拡大して、よく日本語に、「～は～が～だ」の型が頻出する。例えば、「彼は記憶力がよい」= He has a good memory. だの、「彼は神経が太い」= He has a lot of nerve. 等がその典型例であるが、これらの場合の英文例を見てもらえばよく解るが、あくまでも英文では、他動詞 have を用いた「S+V+O」文型をとっている。これらの場合の日本語での、「～だ」に当る部分は、「～がどうである」のような、或る物の「性質」・「状態」について述べているものと解してよからう。尤も、いつもそのように解されるわけではなく、「動作」を表わす場合もないわけではない。要するに、日本語文法で言う、用言（動詞・形容詞・形容動詞）が来るわけである。ただ、和文の述語部分を構成する品詞の如何を問わず、英文では、これらの場合、殆んど「S+V+O」文型をとり、その述語部分には、他動詞が用いられると言う事実が興味深い。勿論、英文の場合でも、和文の場合同様、例えば形容詞述語文を用いて表現し得る場合も決してないわけではないし、否それどころか、抽象名詞主語を多用し、その描写形式に於いて、本来「動作」や「過程」よりも、「状態」や「結果」を重要視する英語には、形容詞述語文は、日本語の場合よりも、遙かに多用されるのである。ただ、ここでは、英語の他動詞構文の多用と相俟って、和文には一般にそのような他動詞構文の少いこと、更に動詞述語文と言っても、和文の場合には、大半が自動詞構文である事実を附記したい。

さて、この辺りで今少し、この「～は～が～だ」の和文表現に当る、英文の基本構文の

例を見てみたい(場合に応じては、ドイツ語のそれをも含めて)。それによって、英語やドイツ語などのゲルマン諸語(the Germanic Language Family)に於いて、この「S+V+O」文型が、如何に普遍的且つ基本的な文型を成すものであるかを垣間見たい。

- (i) 彼は語学の才能がない。 He has no talent for linguistics.
- (ii) 彼女は目が青く、髪がブロンドだ。 She has blue eyes and blond hair.
- (iii) 一般に北欧人は肌の色が白い。 The Scandinavians in general have fair skin.
- (iv) 彼女は目が悪い。 She has bad sight.
- (v) 私はひどく頭痛がする。 I have a bad headache.
- (vi) 彼はクラスの女の子達の間で人気がある。 He enjoys popularity among the girls in his class.

- (vii)

{	A: 「あなたはお腹が空いていますか?」 Haben Sie Hunger?
{	B: 「いゝえ、私はお腹が空いてもいないし、のどが渇いてもいません」 Nein, ich habe weder Hunger noch Durst.

Bの答えを二つに分解してみると、「私はお腹が空いていません」は言うまでもなく、Ich habe keinen Hunger. であり、「私はのどが渇いていません」の方は、Ich habe keinen Durst. の如く、どちらも、「S+V+O」文型をとっているのである。しかも、ここで注目すべきことは、ドイツ語では、日本語とちがひ、この場合では、動詞を打消すのではなくて、名詞そのものを打消す型をとっていることである。これについては、英語でも同様の事実が指摘出来る。次の諸例を見たい。

- (viii) 私はお金がありません。 (ix) 私は食欲がありません。
(英文) I have no money. (英文) I have no appetite.
(独文) Ich habe kein Geld. (独文) Ich habe keinen Appetit.
- (x) 私は暇がありません。 (xi) 彼は娘がいない。
(英文) I have no time. (英文) He has no daughter.
(独文) Ich habe keine Zeit. (独文) Er hat keine Tochter.

最後にこれは、主語の立て方をめぐる西歐語(英独語など)と東洋語(日中両語など)との対比も見ておきたい。つまり、よく言われる中国語の語順などの英語との類似があるが、実際の表現や、発想法そのもの、更に主語の表われ方等々の面に於いて、中国語はやはり同じ東洋の言語である日本語の方に遙かに近い側面もあるのである。例えば、次のような例を見てみよう。

- 実例〔I〕 (和文) 北京駅はどう行けばよいのですか。
(中文) 北京站怎么走啊?
(英文) How can I get to Peking Station?

この文章などを見ている限りでは、日中両語の発想法や、表現形式の類似は疑う余地もない。強いて挙げれば、中文には和文に於ける例の主題を表わす助詞「は」が欠けている位のことか。更にこれら日中両文の主語は如何と言う段になると、尠くとも西歐流の文法範疇では無主語文とでも断定せざるを得まい。つまりここに、日中両語では、例の「状況中心」の説明文が多く、従って「動作主」や或る具体的な行動に關与する人間が主語に立つ如き西歐文の表現との根本的な差異が存するのである。この例の英文は必ずしも例の他動詞を用いた「S+V+O」文型のそれではないが、人間が主語に立っているところが如何にも英文らしい。次は例の「S+V+O」文型をとる場合のそれだが、又別の観点から

見ると、日本語の「状況中心」の説明文に対する英独両文の「人間」が主語に立つ例である。

実例〔Ⅱ〕（和文）私達の家には部屋が六つあります。

（中文）我們房子有六間屋子。

（英文）We have six rooms in our house.

（独文）In dem Hause haben wir sechs Zimmer.

同様の意を表わすのに、各文それぞれ他の表現も種々有り得るが、ここでは上例通り考える。

先ず英文と独文の例については、例の「S + V + O」文型の他動詞構文であり、しかも「人間」が主語に立っている。和文例では、主語は、一応「部屋」と見られるので、やはり英独両文との構文法上の相違が見られる。つまり和文は、あくまでも「状況中心」の説明文であって、動詞は他動詞でなく、自動詞が用いられる。勿論、英独両文に於いても、「状況」を主として説明する自動詞構文が存在しないわけではない。この場合もそのようには書き得る。ただ問題は、和文では、「状況中心」の叙述で、物が主語に立つ自動詞構文でしか書けない時にも、西欧語では、人間を主語にした他動詞構文で書き表わす頻度が高いことである。例えば、「今何時ですか？」などの和文も、英語では、What time do you have? と言い得るし、独語でも、Welche Zeit haben Sie? と言う。和文でこのような表現は先ずムリであろう。更に、「私は不安だ」などの和文の形容動詞述語文も、独語では、Ich habe Angst. と「S + V + O」文型で表現するのが、むしろ一般的である。「私は退屈だ」も同様に、Ich habe Langweile. の型となる。

さて、ここでの中文例に関しては、少し厄介な問題が存する。つまり、「有」なる動詞は、「存在」を表わすのか、「所有」を表わすのかによって、その構文法解釈が異なってくる。字面だけを追って行くと、この「有」は「所有」を表わすように思える。尤も日本人の感覚では、むしろ「存在」ともとれる。肝心の中国人の語感では如何なのか？ 文面や字面だけを追っての類推と、それを話す人の語感とは必ずしも一致しない場合がある。この中文例については、外にも種々の文法的解釈も可能だが、長くなるのでこれ以上ここでは詮索しない。（これに関連して、筆者は、必ずしも従来の中国語文法の枠組にはとらわれていない。新しい解釈も種々有り得る筈だし、何よりも、それを話す人の語感を大切にしたいと考えている。とにかく、この問題は大変厄介で、今この場に馴染まぬ議論である）

ところで、話は変わるが、前にも述べた、「私はお腹が空いています」も、口語英語の表現として、I have an empty belly. があり、やはり、「S + V + O」文型をとっている。更に、「私はビールが一杯飲みたい」なども、口語英語では、I have a thirst for beer. などの如く、やはり「S + V + O」文型で表現されている。ところで、「ビールが飲みたい」の場合の「が」と、お腹が空いている」の場合の「が」とは、日本語の助詞として、その用法の異なるは言うまでもないが（恐らく、前者の「が」は対格を表わし、後者の「が」は主格のそれであろうと判断される）、この様に同じ一つの助詞が、全く異なる機能を有するのは、紛らわしいかぎりではあるが、どの言語にも、それなりの紛らわしい語法は存在するわけで、別にこれは日本語に限ったものではない。

以上ここは掲げた例は、日常極くありふれた基本的な表現ばかりであって、英独語などの外国語を学ぶ初心者が、最初に遭遇する代表的な文章である。つまり斯様な基本的な表現の段階に於いて、既に日本語と、英独両語との間には、その文型や表現形式に決定的とも言い得る差異が見出せるわけのもので、外国語習得の困難さを思い知らされるわけだが、

同時に、外国語研究の興味も尽きぬ所以でもある。

(2) 他動性表現

これは無生物主語、抽象名詞主語及び擬人法 (personification) 等から成り、動詞には一群の強力な他動詞 (例えば, bring, make, compel, find, drive, lead, take, lay, send, force, cause, induce, put, tell, etc.) が用いられる。主に単文から成り、一般に簡潔で、引締まった力強い印象を与える表現である。若干の例を見よう。

- (i) What made her do so? (何が彼女をそうさせたか。戦後のある時期に、このようなバタ臭い言い回しが日本語の中でも使用された事を記憶している人も居るだろう)
- (ii) Familiarity breeds contempt. (英語の諺で、原意は慣れ親しみは軽蔑を育くむ、と言うのだが、日本では、「親しき仲にも礼儀あり」をその訳に当てている)
- (iii) The hotel commands a fine view of the Gulf of Mexico. (そのホテルからは、メキシコ湾がよく眺望出来る)
- (iv) A 20-minute limousine ride will take you to the airport. (リムジンに乗って20分もすれば空港に着くでしょう)
- (v) The payment of my debts left me penniless. (借金を支払ってしまったら、後には一文も残らなかった)
- (vi) My watch says 7:45. (私の時計では今7時45分です)
- (vii) The bare idea of him made her shudder. (彼の事を考えただけでも彼女は身ぶるいした)
- (viii) Another week from now will bring the New Year. (これから又一週間すれば新年がやって来ます)
- (ix) The fall of an apple from a tree led Newton to the law of gravitation. (木からリンゴの落ちるのを見てニュートンは重力の法則を思い付いた)
- (x) What has brought you here? (何故あなたはここへ来たのですか)

(3) 簡潔な英語表現に寄与する補語の用法

これも又和文では動詞多用による複文構造をとる文が、英語では補語の巧みな使用に依り、単文にして簡潔な表現を可能とさせる。和文では、附属語としての機能語 (function word) に多く依存する傾向があるに比し、この場合、英文では内容語 (content word) 本位の表現となり、それだけ compact な表現となる。以下に若干の例を掲げてみよう。

- (i) He always travels **first-class**. (彼はいつも一等に乗って旅行する)
- (ii) She swept the floor **clean**. (彼女は床を掃除して清潔にした)
- (iii) She wore the new shoes **home**. (彼女はその新しい靴を履いて帰宅した)
- (iv) He slammed the door **shut**. (彼は戸をピシャリと閉めた)
- (v) He writes **a good hand**. (彼は字が上手い)
- (vi) He lives **a bachelor** in London. (彼はロンドンで独り暮らしをしている)
- (vii) He stood up, pulled the trench coat **closed**. (彼は立上って、トレンチコートの裾を引き寄せ、ピッタリと着こなしをした)
- (viii) He kicked the door **open**. (彼はドアを蹴って開けた)
- (ix) The land lies **idle**. (その土地は使用されないままで、放置されている)
- (x) Hitler returned to Vienna in 1938 **a dictator**. (ヒットラーが1938年ウィーンへ戻って来た時には独裁者になっていた)

（４）日英両語に於ける肯定・否定表現の不一致

日英両語間に於いて、肯定・否定の表現がいつも必ずしも一致しているわけではない。日本語では否定表現になっている場合でも英語では肯定表現で表わされていたり、又その逆の場合もあると言った具合である。この辺りは各言語の慣用上のクセをよく呑み込んで憶えておきたいものである。但し以下の例が絶対的なものと言うのではなく、日英両語に於いてそれぞれ又反対の表現も可能であると言ったケースもないわけではないが、その場合、意味上や修辞上に若干の差異の見られるは言うまでもないところではあるが、その nuance 把握は non-native speaker の場合中々むずかしいところがある。とにかく実例を見よう。

- (i) Stay where you are. (そこ動くな！)
- (ii) God knows what he is up to. (あの男が何をもくろんでいるのか誰にも解らない。「誰にも解らない」は「神のみぞ知る」とも訳せなくはないが、その様な直訳がやはり何となく翻訳調に響くところから見ても、God knows～ という表現は日本語には馴染みにくいものと言ってよさそうだ)
- (iii) I don't think he is an American. (彼はアメリカ人じゃないと私は思います)
- (iv) She is the last woman to marry such a man. (彼女はあんな男と結婚するような女では決してない)
- (v) Who cares? (誰も気にしはしませんよ)
- (vi) She is far from sweet. (彼女にはやさしさなど全くありません)
- (vii) You talk nonsense! (バカな事言うな！)
- (viii) Keep off the grass. (芝生に立入るべからず)
- (ix) You stay out of this! (お前はこの事に口出しするな！)
- (x) Mind your own business. (人のこと構うな！)
- (xi) This is the most beautiful lake I've ever seen. (こんな美しい湖を私はこれまで見たことがない)
- (xii) This book is free from any misprints. (この本には誤植がない)
- (xiii) The noise kept me awake all last night. (昨夜は騒音のため一晩中眠れなかった)

（５）日英発想法の相異と分解表現

日英両語間に於ける発想法の相異として、修辞学 (rhetoric) で言われる、loose sentence (散列文) と periodic sentence (掉尾文) とがある。言うまでもなく、前者が英文のそれであり、後者が日本文の場合である。つまり、英文では最初の文の出だしの部分で大体の文意の重要な締めくくりをつけて結論めいたものを出しておく。そして後は附帯的な説明を敷衍して述べて行く形をとる。それに比し、日本文の場合は、文末にまで結論は引き延ばされて、従って聴いている者は最後まで話し手が何を言わんとしているかを知る為に thrill と suspense に満ちた状態に置かれることになる。loose sentence の loose とは「気分の弛んだ」の意で、英文が loose sentence と言われるのは、聞き手は最初に大まかな文意を知らされるので、安心した気分となるところから斯く言われるのであろう。それに比し、日本文が periodic sentence と言われる所以は文末、つまり period の部分に来ないと結論が出ないことを称して言われるのであろう。一つには、日本文は動詞中心、述語中心の表現形式をとり、他の「文の成分」(The Elements of the Sentence) は須らく連用修飾語となって述語部分に収斂し行く傾向がある。しかも日本語に於ける「修飾

・被修飾」の関係は、修飾語 (modifier) がどんなに長くなっても、又修飾語が文形式をとったものであっても、常に必ず被修飾語に前置されると言う原則がある。主語をも含めて、「文の成分」のすべてが、述語の修飾語として働くのであれば、否応なしに日本文では述語が文末に来ることになる。この辺りの日本文の表現形式と語順との関係、「文の成分」のそれぞれの性格と、その相互関係等をめぐって更に一步踏み込んだ考察が為されなければならないところだが、長くなるのでこれ以上の言及は避けたい。

さて、以上の事実を踏まえて、これの具現された例として、謂ゆる英文に於ける「分解的表現」の諸例を以下に見たい。

- (i) He hit her in the face. (彼は彼女の顔を叩いた)
- (ii) She is fond of music. (彼女は音楽が大好きです)
- (iii) My grandpa is hard of hearing. (私のおじいちゃんは耳が遠いのです)
- (iv) He is good at Chinese. (彼は中国語が得意です)
- (v) Jack is quick at working sums. (ジャックは計算が早い)
- (vi) He is clever with his pen. (彼は筆が立つ人である)
- (vii) He is slow in learning English. (彼は英語を覚えるのが遅い)
- (viii) Most Japanese are shy by nature. (大抵の日本人は生まれつき内気な人が多い)
- (ix) She is lame of one leg. (彼女は片足が不自由です)
- (x) It is very kind of you to say so for me. (私の為にそうおっしゃって下さるとは御親切ですね)
- (xi) I'm glad to see you. (お目にかかれて嬉しいです)
- (xii) Will you help me with this? (これを手伝っていただけませんか)
- (xiii) He is sharp of tongue. (彼は毒舌家だ)

(6) 内容語 (content word) 本位の表現と一語文 (one-word sentence)

日英表現の相異の一つに、英語の内容語 (content word) 本位の表現法に対し、日本語では附属語本位とまでは言わぬが、内容語 (日本語文法では、ほぼ自立語と同意と考えてよからう) のみによる表現は少く、どうしても附属語が附着してくる場合が多い。日常の簡単な口語会話表現から始まって、少し改まったフォーマルな演説口調の表現に至るまで、一般に日本人の「物言い」の特徴として、どうしても内容語ズバリの表現、或いは、内容語と内容語が直結された表現などは極めて少ないのであって、内容語には必ずと言ってよいほど附属語が附着していて、場合によっては、内容語の2, 3倍にもものぼる語数の附属語が附着し、しかもそれらが実際に発声される場合には、むしろ附属語の部分に強勢が置かれて発音されることも多い。例えば、国会での各大臣の答弁などによく見受けられる典型例に、「その事に関しましては、善処致したく存じて居る次第であります」などと言うのがあがるが、誠に冗長 (redundant) そのものと言った答弁ではある。要するに、答弁のポイントは、「その事については、善処したい」と言うことであろう。聞き手の方は、「～善処致したく」の辺りまで聞いていると、その次に何か内容のある発話が為される (例えば、「関係各省庁に早速その旨伝達し、速かに解決への方策を講じたいと思います」等) ものと期待して聴いていると、何の事はない、ただ無意味な、インギン無礼の丁寧体の表現で終るだけで、肩すかしを喰わされただけのヤリ切れない無力感を味わわれる。しかも、「～善処致したく存じて居る次第であります」の冗長な「物言い」の各語句のそれぞれに間を置いて、強勢アクセントをつけて発音されるものだから、聞き手としては、全く

たまったものではない。散々、勿体をつけられ、引延ばされた上で、ピシャッと水をぶっかけられたも同然と言った所だ。別に国会での大臣答弁に限ったことでなく、同様の「物言い」は日常会話の中にも散見され、例えば、相手の何かを褒める場合でも、「すばらしい」と言えば済むところを、「すばらしい**ですね**」の如く、「ですね」が附着してくる。つまり内容語たる形容詞「すばらしい」の一語だけでは収まらず、「丁寧」の意を表わす助動詞「です」と、終助詞で「確認」や「強調」の意を表わす「ね」が用いられている。これらが、一般的な日本人の「物言い」の特徴なのであって、従って日本語では、内容語本位の表現にはどうしても馴染みにくいところがある。その点英語の方では、機能語（function word）と呼ばれるものはあるが、謂ゆる附属語に当るようなものは存在しないと言ってよい。従って、内容語本位の発言が可能となり、特に又内容語の中でも、その中心的存在とも言える名詞を用いた一語文（one-word sentence）と呼ばれる、極めてムダのない、簡潔明快な表現が数多く見出されるのであって、以下にその若干例を掲げてみたい。括弧内の和訳例とよく見較べて研究してほしい。

- (i) **Objection!**（「異議あり！」「これなどは、日本語の表現としては簡潔な方である。つまりここでは附属語は使われていない。漢語と大和コトバが各一語ずつ組合わされているわけだが、これは議場などの特別な situation でのみ使用可能の表現で、一般的にどの TPO でも使えると言った類のものではない）
- (ii) **Beans!**（「そんなバカなこと信じないぞ！」この辺りの表現になってくると、日本語ではとても一語文では表現されまい）
- (iii) **Silence!**（静粛をお願いします）
- (iv) **Nonsense!**（バカなこと言うな！）**Rubbish!** や **Bullshit!** など同様の意で用いられる。
- (v) **Snacks!**（山分けにしろ！）
- (vi) **No sweat!**（案じることはないよ！ 平気だよ！）
- (vii) **Small world!**（「世間は狭いなあ！」和訳例では、「感動」・「詠嘆」の意を表わす「なあ」なる終助詞が使われているが、勿論、英語にそのような助詞などと言うものはない。それでは英語では、この場合、如何にして「感動」や「詠嘆」の気持を表出させているのであろうか。つまり、ここに英語に於ける音声アクセント面での役割の相対的な比重の重さがある。日本語で具体的なコトバを用いて表現される部分が、英語では、上下の intonation, 強弱の accent, 緩急の rhythm, その他感情の起伏を含めた声調そのものや、顔の表情の豊かさ等々、実際のコトバ以外の方法でそれに代置させようとするのである。この辺りが、日英表現の相異点の決定的なものである）
- (viii) **Big deal!**（「大したもんだよ！」これは、つまらぬことに対して、皮肉の意をこめて言われる表現である）
- (ix) **Happy motoring!**（「楽しい自動車旅行を！」この和訳では何とも締らないが、これはやはりそもそも日本語では、こんな言い方そのものがないのと、原文を直訳した故であろう）
- (x) **Many thanks!**（「大変有りがとうございました」中国語に「多謝！」と言うのがあるが、英語との照応が面白い）

(7) 複合名詞 (noun compounds) に見る英語の簡潔表現

英語に於いて「N+N」型 or 「N+N+N……」型の、つまり名詞が他の内容語や機

能語を介在させることなく直結して羅列される型の表現が散見される。日本語は動詞多用型の言語であり、更にその膠着性の故に、助詞・助動詞などの附属語の頻繁な使用が見られ、どうしても上述の英語に於ける如き名詞を羅列する型の謂ゆる複合名詞による表現に馴染み難い。勿論、日本語に複合名詞が皆無である筈もなく、大和コトバに依るものや、特に漢語を用いれば、結構数多くの複合名詞も日本語に存在する。本来、孤立語に属する漢語は、むしろ複合名詞の形成には、屈折語たる英語よりも遙に適合性を有しており、その意味では、かなりの数の漢語を包含する日本語に相応の複合名詞が見られても何の不思議もない。ただ、ここでは特に英語の複合名詞のみに触れ、それらが日本語では、どのように表現されているかに注目したい。早速実例に触れてみよう。

- (1) the 8: 30 p. m. London bus (午後8時30分発ロンドン行バス)
- (2) bedroom closet door (寝室の押入れの戸)
- (3) fiberglass window curtains (ファイバーグラス製の窓のカーテン)
- (4) the basement apartment assault (地階のアパートで発生した襲撃事件)
- (5) a miracle man (「奇蹟を行う人」又は「奇蹟を呼ぶような才能の持主」)
- (6) a remittance man (親元からの送金で暮らしている人)
- (7) designer jeans (ブランド物のナウいジーンズ)
- (8) cold war enemy propaganda (冷たい戦争の下での敵の宣伝)
- (9) hesitation noise (ためらいがちに遠慮しながら立てる音)
- (10) a melting pot neighborhood (人種のルツボと化した隣近所)
- (11) Capone beer truck driver (カポネのビールを積んだトラックの運転手)
- (12) Monday morning quarterback (他人のしたことを、あと知恵で批判する人)
- (13) tennis elbow (テニスのしすぎで痛む肘、つまり「テニス肘」のこと)
- (14) a bread-and-butter letter (御馳走に対する礼状)

以下、具体的な若干例につき、少しく説明を加えながら検討してみよう。

- (i) a football knee (「フットボールで傷めた膝」英語では、名詞が並列して複合名詞を作っているが、日本語ではそのような簡潔な言い廻しが出来ず、助詞や動詞を用いて名詞と名詞を結んでいる。つまり英語の場合のような名詞の直結がこの場合は出来ないのである。「フットボール膝」とは未だ聞かぬ)
- (ii) a day laborer (「日雇い労務者」、この例でも英語の方は、名詞と名詞が直結された複合名詞となっているが、日本語の方では、名詞「日」と「労務者」を「雇い」なる動詞「雇う」の連用形が繋げている。やはりその分だけ英語の表現より冗長なものとならざるを得ない)
- (iii) water cart (「水売りの車」これなど日本語の方はかなり冗長な表現だ。名詞「水」と「車」の間に、動詞「売る」の連用形「売り」と格助詞で連体修飾語の働きをしている「の」が介在し、それら2つの名詞を結び付けているわけだが、やはり英語の「N+N」型の如き表現とは成り難い)
- (iv) sun helmet (「日除け帽」、日本語の語形成の方は、「名詞+動詞連用形+名詞」の型で、やはり動詞使用は避けられないようだ。英語では言うまでもなく、名詞だけの羅列となっている。hand pump「手押ポンプ」なども同様例)
- (v) birthday present (「誕生日の贈物」これなども、やはり連体修飾語としての格助詞「の」が名詞と名詞の間に介在する。a bedroom door「寝室のドア」、a dining-room window「食堂の窓」なども同様例。英語ではすべて名詞直結型となっている)

る)

- (vi) **generation gap** (「世代間のズレ」これも和訳例では、連体修飾語としての格助詞「の」が必要であるが、カタカナ外来語として使用される場合は、「ジェネレーション・ギャップ」の如く、特に助詞「の」を介在させることなく日本語としても名詞直結型で使用可能であるのは面白い現象だと言えよう)
- (vii) **a mystery man** (「謎の人物」これなども、英語では名詞と名詞が直結されているが、日本語では、特に大和言葉がこの場合先行しているが、やはり連体修飾語としての格助詞「の」が介在して、次に来る名詞に接続する。しかしこれも漢語を用いて「怪人物」などとすると、特に附属語は必要としない。mystery voice「陰の声」なども上例と同様例である。なお先程の「怪人物」の「怪」は元の中国語では、先ず形容詞の用法があり、漢語系形容詞として用いる場合は、日本語の中でも附属語ないしは形態変化を必要としないが、漢語系形容動詞の場合は形態変化を起し、例えば、「奇怪な人物」などのように言うこともある。但し、形容動詞という名詞を認めるか、それともそれを「名詞」+断定の助動詞「だ」とするかについての論議もあるが、その事には今は触れない。日本語に於いて、どのような場合に名詞と名詞の直結が可能であり、どのような場合にそれが不可能で附属語を必要とするか、その場合の、語構成 (word-making) における大和コトバと漢語、更にはカタカナ外来語等の組合わせが如何なる様態をとっているか等、興味深い問題が山積しているが、ここではそれらについて言及している余裕はないが、いずれ解明されねばならぬ問題ではある)
- (viii) **a window seat** (「窓側の席」これも無理すれば、「窓席」とも言えなくもないが、あまりそのようには使わないようだ。「窓席」と言った場合は、大和コトバ名詞が2つ直結された複合名詞を形成しており、その場合、前に来る名詞が従要素で、後の名詞が主要素となっている。つまりこのように純粋の大和コトバでも、名詞の直結はいくらでも可能であるわけだが、それがどのような場合に可能であり、どのような場合は不可能であるか等について、漢語やカタカナ外来語等との絡みもあって、中々複雑なわけで、その解明は今後の課題である)
- (ix) **a match girl** (「マッチ売りの少女」例のアンデルセンの童話の中に出てくる物語の題名だが、英語の原題を直訳すれば、「マッチ少女」となって、これではやはり日本語としては落着かないと言うか、舌足らずの感がある。何故日本人にはそのように感じられるのかが微妙なところで、是非共その点を解明したいところだが、今はその余裕はない。ただ、これと同様の例が外にも数多く存在する事実だけを指摘して置く)
- (x) **fire tower** (「火の見櫓」これは一見して、「火の見」と「櫓」なる名詞が直結されているように思えるのは、実は、「火の見」だけで、「火の見櫓」と同様の意で用いられることから解る。ただ、「火の見」と言う、大和コトバ名詞のそのその語構成は中々厄介だ。勿論それなりの解明は可能だが、とにかく、大和コトバの語構成、特に各種の助詞の用法は綿密な分析が必要で、とてもここでは詳述し得ない課題である)
- (xi) **a vacation hotel** (「休暇を過ごす為のホテル」和訳の方は、何とも長たらし連体修飾語が付いているが、英語の方の複合名詞は名詞2語が直結されているだけの極めて簡潔で、スッキリした表現となっている。この辺りが最も問題となる箇所で、

よく漢語を用いて、英語のそれと同等乃至はそれを上廻る簡潔な表現も可能な場合も多いが、果して大和コトバではどうなのであろうか。興味深い問題ではある)

- (xii) the London Poles (「ロンドン在住のポーランド人」) この場合も、英語では中々簡潔に表現しているのには感心させられる。やはり和訳では、漢語を使っているが、「在住」の如く動詞的要素が介在する。勿論、「ロンドンのポーランド人」とも言えなくはないが、その場合でも、格助詞「の」はやはり欠かせまい)

(8) 日本語の動詞は、英語では屢々前置詞でそれに代置され得る

日本語が動詞中心の言語であることについては、これまでも各所で触れて来た。又英語はその反対に名詞中心の言語であることから、日本語に比し、文中での動詞依存率は低く、その反面、前置詞が日本語の動詞に代って多用される傾向が強い。それらのいくつかの例を以下に紹介したい。それらの例を通して、日英表現上の差異の一端に触れ、和文英訳などの際の参考例にも供したい。

- (i) He is **into** rock music. 「彼はロック音楽に熱中している」
(ii) What are you **after**? 「君は何を求めているのかね?」
(iii) Are you **for** or **against** it? 「君はそれに賛成なのか、それとも反対なのかどっちなんだ」
(iv) They are now at table. 「彼等は今食事中です」
(v) She'll go to Karuizawa **for** the summer. 「彼女は軽井沢に避暑に出かけます」
(vi) Let's discuss the matter **over** coffee. 「コーヒーでも飲みながらその問題を討議しよう」
(vii) They were dancing **in** a circle. 「彼等は輪になって踊っていた」
(viii) He refused to dance **to** the music. 「彼はその音楽に合わせて踊ることを断わった」
(ix) I'm always **at** your service. 「私はいつでもあなたのお役に立ちますよ」
(x) He's now **on** the line. 「彼は今電話に出ています」
(xi) Then Germany was **at** war with the Allies. 「その当時、ドイツは連合国と交戦状態にあった」
(xii) He was **on** the basketball team. 「彼はバスケットボールのチームに入っていた」
(xiii) Look at the map **on** the wall. 「壁に掛けてある地図をごらんください」
(xiv) Mr. Johnson is now **in** conference. 「ジョンソン氏は今会議に出ています」
(xv) She is now **on** a coffee break. 「彼女は今コーヒーを飲んで休んでいます」
(xvi) I like the vase **with** handles. 「私はあの取っ手のついた花瓶が気に入っています」

(9) 英語に於ける品詞の転用 (Functional Shift) は多彩を極め、日本語では想像し得ないケースが多発する

元々、英語に於ける品詞の転用 (Functional Shift) は極めて flexible で且つ又頻繁に行なわれるもので、その点日本語などには、そのような現象はあまり見られず、そこには格段の相異が存するようである。色々な品詞間で転用が行なわれる次第だが、特にここでは、動詞(V)から名詞(N)への転用と、その逆の名詞(N)から動詞(V)への転用に焦点を絞って、若干の例に当たってみたい。なお、中国語に於いても、このV⇄N相互間の転用は頻繁に行なわれているようで、この点でも日本語と異なり、中国語のそれは英語と類似の

現象が見られることを付記しておく。

(I) V→N (動詞から名詞への品詞の転用例)

- (i) I always enjoy the **come and go** of the seasons. 「私はいつも季節の移り変わりを楽しんでいます」
- (ii) Some people have a lot of **go**. 「元気一杯な人々もいる」
- (iii) He has the last **say** on the matter. 「彼はその問題に関して最終決定権を持っている」
- (iv) the **haves** and the **have-nots** 「持てる国と持たざる国」
- (v) This is our own **make**. 「これは自家製です」
- (vi) They enjoyed a great **take** of fish yesterday. 「彼等は昨日大漁だった」
- (vii) There is no more **run** left in him. 「彼はもう走る力がない」
- (viii) The disarmament talk between the US and the USSR is now at a **stand**. 「米ソの軍縮交渉は今や行き詰まっている」
- (ix) Let's have a **look** for it together. 「ひとつ一緒に探しましょう」

(II) N→V (名詞から動詞への品詞の転用例)

- (i) He **kings** it over his classmates. 「彼はクラスメートに対して王様のように君臨している」
- (ii) She is **dolled** up for the date with him. 「彼女は彼とのデートにそなえて着飾っている」
- (iii) He **sunned** himself on the beach. 「彼は浜辺で日光浴をした」
- (iv) Our family always **summers** in Karuizawa. 「私達の家族は夏はいつも軽井沢で過ごします」
- (v) **School** yourself to keep your temper. 「カッとしないように自分を修養しなさい」
- (vi) The zone **was policed** by the United Nations forces. 「その地域は、国連流遭軍によって、治安が維持されていた」
- (vii) The sex maniac **cupped** her on the tits from behind. 「その色情狂は、背後から彼女の乳房を両手で押えた」

(10) 形容詞 or 形容詞相当語句に見る日英両語の語構成 (word-making) 及び統語法 (syntax) の様態の差異

日英語の語構成については、何もこと形容詞に限らず、名詞を始めとして、動詞や副詞その他の凡ゆる品詞に及んでその比較対照が為し得るわけであるが、ここでは特にその形容詞乃至は形容詞相当語句のそれについて考えてみたい。名詞のそれについては、先程の複合名詞の項目のところで若干触れた。この語構成の問題はそれだけで一つの大きな theme に成り得るもので、ここにそのすべてを網羅することは為し得ず、極く狭く形容詞を中心にして、形容詞相当語句をも含めて少し考察を進めてみたい。

ところで、英語の基本五文型の一つに、例の「S+V+C」文型がある。この場合のCは謂ゆる補語 (Complement) と呼ばれる文の主要成分の一つであり、普通、名詞ないしは形容詞、或いはそれらに相当する語句がこの位置を占める。

而して、英語でこの「S+V+C」文型で表現される文にどのような和文が対応するかを考えてみたい。尤も「S+V+C」文型の英文と言っても、Cの中味により、種々の様態が有り得る。例えば、Cが名詞のみから成る場合、形容詞のみから成る場合、「形容詞

＋名詞」の結合型から成るもの、その他いろいろの場合が有り得よう。そしてそのような C の性格に応じて、和文の表現にもそれぞれに対応する種々の様態が存在し得よう。具体的な例で考えた方が分り易く、早かろう。

Ex. I

- (i) 彼女は料理が上手い。(She is a good cook.)
- (ii) 彼は射撃が上手い。(He is a dead shot.)
- (iii) 彼女は背が高い。(She is tall.)
- (iv) 彼は気が強い。(He is bold.)

これらの例は、日本文の方はすべて、「～は～がどうだ」の意を表わす構文法となっているわけだが、(i)、(ii)の組合せと、(iii)、(iv)の組合せとには、和文・英文共に相違点が見出される。(i)及び(ii)の「料理が上手い」とか、「射撃が上手い」に対応する英文は、いずれも「形容詞＋名詞」結合で表わされているに比し、(iii)と(iv)で、「背が高い」及び「気が強い」の部分の英文は形容詞一語で表現されている。勿論、これらの場合、和英両文とも、他にいくらでも異なった表現や文型を用いて同趣旨の文章を書くことは可能であるわけだが、比較の便宜上、ここでは、これらの例のままで考えてみたい。

さてこれらの例を見て、色々の興味深い指摘が為し得る。(i)と(ii)については、和英の構文法が根本的に異なるので、何とも言い様もないのだが、ひょっとすると次の様な英文に書きかえてみると、その元の和文表現に近くなるとも考えられないか。

- (i) She is good at cooking.
- (ii) He is good at shooting.

勿論、これらの例に於ける和英両文の構文法は根本的に異なるのであろうが、しかし上例の様な Loose order をとる謂ゆる分解表現が、何となく元の和文表現と類似の気持を与えることは否定し得ない。つまり、「～は～が」の和文の表現も、二段構えで物を言っているようなところがあり、それが英語の分解表現と一脈通ずるところがあるように感じられるのであろう。

そんな風に考えれば、実は、(iii)と(iv)についても次の様にその英文を書き換えられる。

- (iii) She is tall of stature.
- (iv) He is bold of temper.

この様に書くと、やはりこれらは例の分解表現で二段構えの思想の構え方である。謂ゆる Loose order 語順をとっていることも言うまでもない。尤もこれらの英文の場合、最後の of 以下の部分が省略されて、形容詞だけが独立して用いられるようになったものと思われる。この辺りは、和文の場合はまだ名詞と形容詞が不分離で、「背が高い」と言わないことには、「彼は高い」だけでは、尠くとも現在の日本語としては意味不明である。「気が強い」についてもほぼ同様の事が言い得る。

さて斯様に考えて来ると、実は日本語では二つの構成要素から成る形容詞相当語句が、英語では一つの構成要素で表現し得ると言ったケースが数多くあるのではないかと思われる。そこでそれらの例について少し考えてみたい。

Ex. II

- | | |
|----------------------|------------------------|
| (i) 頭が悪い (stupid) | (v) 尻が重い (lazy) |
| (ii) 頭が良い (clever) | (vi) 尻が軽い (flighty) |
| (iii) 気が小さい (coward) | (vii) 気前が良い (generous) |
| (iv) 頭がおかしい (crazy) | (viii) 心臓が強い (cheeky) |

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| (ix) 背が低い (short) | (xv) 元気がいい (cheerful) |
| (x) 行儀がわるい (rude) | (xvi) 元気がない (cheerless) |
| (xi) 身体が大きい (big) | (xvii) 気が重い (melancholic) |
| (xii) 声大きい (loud) | (xviii) 才能がない (untalented) |
| (xiii) 自尊心が強い (proud) | (xix) 魅力がない (unattractive) |
| (xiv) 人気が悪い (unpopular) | (xx) 締まりがない (loose) |

これらの例は挙げて行けば、いくらでも出て来るものと思われる。勿論、この中には、先述もした通り、外の表現で言い換え得るものもあり、例えば、英語に於いても、二つの構成要素に分けて表現可能な場合も決してないわけではない。ここではあくまでも最も使用頻度の高いと思われる例だけを特にとり上げて便宜上比較したままで、外にも色々の比較が可能であると言うまでもない。ただ、日本語に於いて、「～がどうだ」と言う形式の形容詞相当語句が非常に数多く存在し、どうしても構成要素が2語から成る場合に、英語では、ズバリ一語の形容詞で表現し得る場合が多いようである。尤もこれも比較の例のとり方では、その逆の場合も当然出てくるものと思われるが、ここではそれには触れない。これは必然的に、日英両語の統語法 (syntax) の様態とも関連してくるわけで、例えば、和文の「～は～がどうだ」の構文法で、「～がどうだ」の部分はむしろ「～は」に対しては述部を形成しているともとれる。この場合、「～は」の部分は当然にも主部と捉えられる。勿論、斯様な捉え方には賛否両論が有り得よう。例の「は」は主題を表わすもので、「が」こそが主格に立つ格助詞であるとの説は余りにも有名である。しかし筆者がここで言いたいのは、そのような文法的な厳密な理屈とは別に、現実にそのような文章を述べている人や、聞いている人にとっては、素直に考えて、例えば、「彼は」の部分の主語として捉え、「背が低い」の部分を一括して述部と捉えているのではないか。これを文字通り、「彼に関して言えば、背が低いのである」などと理解して居る人は少なからう。それを支える一つの根拠として、「背が低い」がそのまま inseparable entity として限定的用法 (attributive use) にも使えることで、「背が低い男」などと言える。つまり、この場合の、「背が低い」は「主語+述語」と言う二つの対立する要素から成る概念ではなく、全体として、連体修飾語となって「男」を限定する、切り離すことの出来ない有機体とみた方がよさそうである。

そのように考えてくると、例えば、「昨日は雨が降った」などの文も、一般には、日本人の捉え方としては、「昨日は」と「雨が降った」の様に分け方をしているので、「昨日について言えば、雨と言うものが降ったのだ」などと捉える人は皆無に近いのではないか。それでは、何故このようになるのであろうか。その一つの理由は、日本文では、述部に表現の中心が置かれ、極端に言えば、文の他の成分はすべて述語の連用修飾語となって、述語に収斂し行くものとも言い得るのであって、「～がどうだ」の部分の「～が」なども、「どうだ」の部分に吸収合併されてしまっているものと見做される。

それから前述もしたのであるが、これらの日本語の形容詞相当語句は、場合によっては、それと同意味の一語の形容詞で代置し得る (例：頭が良い—賢い、気立てがよい—やさしい等) のであって、その事実を鑑みても、本来これら二つの構成要素は inseparable なものと見做すことが出来るのである。更にそれらの中のある形容詞に至っては、例の複合名詞のそれと同様、「熟した」形容詞として、或る特定の比喩的な意味を持った、謂わば複合形容詞とも言い得るもので、例えば、「尻が重い」、「尻が軽い」、「頭が痛い」、「手が速い」等々すべて、叙述用法 (predicative use) 同様、限定用法 (attributive use) にも

使用可能である。尤も、限定用法としては、これらの場合、格助詞「の」が、同じく格助詞「が」に代置され得るが、その場合であっても、連体修飾語としての性格が強まり、同様にして、これら形容詞相当語句の構成二要素の紐帯は強い。

ところで、よく和文英訳や、英文和訳などを試みている際に、日英語の表現で、特に単語次元で、その語構成の様態の差異を思い知らされることがある。ここでは、特に形容詞を中心にして考えて来たわけだが、それらは何も形容詞に限られたわけではない。名詞次元については言うまでもなく、動詞や副詞の次元でもそれらの差異は見られる。以下に少しそれらの例を *at random* に掲げてみたいと思う。

- (i) hungry 「腹が空いている」これなども、英語では、形容詞一語で表現されているのに比し、日本語では、2つの要素から成っている。これは更に「状態」について述べているのであろうが、この「～ている」の和語表現に対応する英語形容詞一語ズバリの表現は数多い。angry 「腹が立っている」、thirsty 「のどがかわいている」、bald 「頭が禿げている」、inconsiderate 「配慮が欠けている」etc.)
- (ii) understading 「理解がある」、日本語で、「～がある」の表現が、英語では、be 動詞+形容詞の型で表わされる場合が多い。ただし、これは何も叙述用法 (predicative use) の場合だけでなく、限定用法 (attributive use) の場合も使用可能である。attractive 「魅力がある」、competent 「能力がある」、ambitious 「野心がある」、amiable 「愛嬌がある」、appealing 「迫力がある」etc.)
- (iii) sneeze 「クシャミをする」、実は、日本語で、「～をする」のサ行変格活用動詞は数多い。この場合、必ずしも「を」を必要としない場合もある。いずれにせよ、「する」なるサ行変格活用動詞にしないことには、動詞にならないようである。つまり、「名詞+する」型の動詞と言うことにならうか。この場合の「名詞」には、漢語系名詞が数としては多いのではないかと思われるが、大和コトバ系名詞の来ること勿論有り得る。cough 「咳をする」、smack 「舌打ちする」、piss 「小便する；オシッコする」、yawn 「あくびをする」、blink 「またたきする」、hiccough or hiccup 「しゃっくりする」、gargle 「ウガイをする」etc. の用例では、どうも英語の方は、onomatopoeia に類する語が用いられているようだ。更に、日本語で、「～がする」と言ったサ行変格活用動詞も有る。beat 「動悸がする」や、chill 「寒気がする」等であるが、これらの場合も、助詞「が」は省略可能である。前者は漢語系名詞が用いられ、後者には、大和コトバ系名詞が用いられた例である。その他、日本語で、「農業する」とか、「農業をする」などの言い方はあるが、「工業する」や「工業をする」とは言うまい。更に「科学する心」とは言うが、「技術する心」などは言うまい。いずれにせよ、このサ行変格活用動詞「する」の用法をめぐっては、種々の複雑な用例が有り、一つの独立した theme として取扱うべき類いの課題であろうと思う。ただ、漢語系名詞に「する」を付して動詞化する造語法は、幕末から明治期にかけての翻訳文化の影響もあろう)

さて本項では、特に形容詞や、形容詞相当語句に焦点を据えて考察を進めたのであったが、日本語での純粋な、本来の和語の形容詞の場合、英語の形容詞の語構成とは勿論その様態を異にするのは言うまでもないことであるのだが、特に例えば、次のような語の場合には、日本語でそれに当る形容詞型を求めることには無理があるようである。

Hitlerite 「ヒットラー主義者の」、Shakespearean 「シェイクスピアの；シェイクスピア風の」、Caesarean 「シーザーの；ローマ皇帝の」、Marxian 「マルクスの；マルクス主

義の」、Japanese「日本の；日本人の；日本語」、Chilean「チリの；チリ人の」etc.

つまり、これらの場合、日本語では、どうしても主として、連体修飾語の働きをする格助詞「の」を必要とするわけで、人名、地名、国名等をそのまま何らかの屈折や活用によって形容詞化するのは無理なようである。その点、日本語の名詞はそれだけ分析的な言語（Analytic Language）であると言えるし、英語のそれは、逆に総合的言語（Synthetic Language）であるとも言えよう。

一般に、どの言語を問わず、複合語を構成する要素として名詞の占める比率は圧倒的に高いと言える。特に中国語や英語にその典型例を見出し得るのである。英語はこれまでも述べて来たように、本来、名詞中心型の言語であるため、従って当然にも、その名詞を修飾する形容詞の数も多く、又その様態も多彩を極める。それに比し、日本語は本来、動詞中心型の言語であるため、形容詞よりは副詞の方が発達し、又多用されてもいる。特にその感情表現に占める副詞ないしは、その相当語句の多彩さは、英語のそれは遠く日本語に及ばないようである。谷崎潤一郎がその「文章読本」の中であったか、たしか日本語には形容詞が少い云々と述べていたように記憶しているが、大いに根拠のある発言であろう。これには、和語に抽象語が少く、又和風文体に抽象名詞主語が少いために、形容詞の数が少く、又その使用も多くない等の要因も考えられるかも知れない。つまり、日本語の文章には、謂ゆる動詞述語文が圧倒的に多いのであり、形容詞述語文や、名詞述語文等は比較的少ないのだと言い得よう。更に同じ形容詞と言っても、和風文体の場合は、翻訳文体や欧文脈の文章などよりも、その叙述用法（predicative use）の方が、限定用法（attributive use）よりも多用されるものと思われる。例の一語文（one-word sentence）に於ける形容詞のそれも、英語の形容詞一語文の多用に比し、日本語のそれは遙かに少ないものと思われる。

む す び

一口に日英表現比較と言っても、実はそのアングルの取り方によって多種多様の比較が可能となる。語彙（vocabulary）から始まって、表現形式更に文体（style）にまで及び、又「話しコトバ」の観点からは、そのコミュニケーションの具体的様態の比較も興味深いものがあり、それらについては、筆者なりにこれまでも若干の記述をなして来た。更に音声面からの比較も、例えば日英両語の音節構造の違いをはじめ、音声アクセント面からも数々の興味深い比較が為し得るものと思われる。

ところで斯様な小論の中で、上記の如き多岐に亘る観点からの比較検討などは、紙数の制限もあり、とても満足に行なわれ得ないのは言うまでもない。それでも筆者としては、当小論の中では、出来る限り悠張って、種々の角度からの日英両語の比較を試みた積りではある。

更にここでの主要テーマは、日英語の表現比較と言うことではあるのだが、日英両語はその語族・語系を全く異にする、相互に余りにかけ離れた距離を置く言語の間柄にあり、その為、ヨリ具体的で解り易い比較を行うために、ドイツ語やフランス語をはじめ、特にその構文法等に於いて日本語とかなりの類似を見せる中国語などを援用した。英語と同じ印欧語族（The Indo-European Language Family）に属するドイツ語やフランス語も、その細部に及ぶと、それなりに微妙な違いをのぞかせている辺りも興味深い点であるが、更に一般の日本人の間に流布している中国語の英語との文法的類似も、実はあくまでも皮相な（superficial）な見方に過ぎず、これをもっと深く構文法（constructional grammar）

の立場から見ると、その日本語との類似の方にヨリ驚かされるのである。例えば、中国語の「東風市場到了!」なる表現は、「東風市場に着きましたよ」という日本語に容易に置換され得る。日本語の場合は、まだしも格助詞「に」がある為、その理解が容易であるが、格関係が明示されない上記の中国語の表現は、西欧人にはヨリ一層理解し難い所があらう。

日本語によく散見される、「～は～が～だ」の構文も、英文の場合、He likes sweets. (He has a sweet tooth. なる idiomatic な言い方もある) (彼は甘い物が好きだ) の如く、「S+V+O」の他動詞構文となるか、He is a good marksman. (彼は射撃が上手だ) の如く、「S+V+C」の名詞述語文となる場合が多い。「形容詞述語文」の中で、特に抽象名詞主語の結果として招来されるものは英文の方にヨリ多く散見される。No telephone service is available around here. 「この辺りは電話が引かれていない」英文では主語を始めとして、謂ゆる「文の成分」なるものが、文中に明示される場合が和文に比し圧倒的に多いわけだが、例えば主語に関して、例の非人称の it などが有り、そこより日本人には中々理解しにくい it に関する複雑な種々の用法がある。外にも there 構文と言うのがあり、there が文頭に来て、一見それが主語であるかの如き様相を呈する文がある。この there 構文なども日本人の英語学習者には扱いにくい構文の一つであり、それだけに「英語らしい表現」を形成する項目の一つと成り得るものである。It is all over with me. 「僕は万事休すだ」とか、Let there be no misunderstanding about it. 「それについては、誤解のないようにしておきましょう」などの例に於ける it や there の用法に注目したい。それから本論では触れなかったが、「S+V+O」文型と共に、その延長線上にある「S+V+O+O」文型についても注目したい。この dative verb を用いて二重目的語をとる文型も、「英語らしい表現」を形造る有力な代表例であり、Give it another good thought. 「もう一度それをよく考えてみなさい」や、I owe you nothing. 「俺は君に何の借りもないぜ」等の表現に慣れたい。日本語の文法範疇にない「補語」なる概念は日本人には解りにくいところもあるが、とにかくこの補語をうまく使いこなすことで、極めて英語らしい簡潔な文章が書けるわけで、Let's fly JAL to California. 「JAL に乗ってカリフォルニアに行こう」などに於ける JAL なる補語の用法をよく味わいたい。

最後に、案外、日本人が普段あまり気付いていないことで、英語の表現との微妙な差異の見られる例を二、三挙げてみたい。「馬鹿だなお前は、何をボンヤリしてたんだ」なる和文に対して、You must have been dreaming. (君は夢でも見ていたんだろう) などの英文が照応するし、「おしゃべりは止めろ!」なる和文に、You talk too much! (君は喋り過ぎている) などの英文の表現がある。和文の表現では、自分の主観的判断や感情が強く前面に出て、ズバリ相手をストレートに非難したり、後者の例のように禁止命令形をとることが多い。一方、英語の表現では、相手に座標の中心を据えて、もう少し冷静に、ヨリ客観的、理性的に述べて、最終的な判断は、あくまでも相手自身に任せると言った風な態度が読み取れる。この辺りは、確かに、日本人と英米人の性格の違いが如実に浮彫りにされていて、翻訳の作業などが一筋縄では行かないことを痛感させられる。「Johnny, breakfast is ready.」と母親が呼んでいるのに対し、Johnny は、「I'm coming.」と答えているなどの例で、その答えの和訳は、「今、行きますよ」となっているが、英文の方は、相手に座標を据えて、go ではなく、come なる動詞を用いている。斯様な例は、枚挙に暇なく、いくらでも挙げられるが、この角度からの日英表現比較については、興味深い事でもあり、別稿にて又の機会に詳述したい。

参 考 文 献

- 講座日本語学12 外国語との対照Ⅱ 明治書院
 英独文法比較考 曾根国介著 泰文堂
 日英対照文章読本 角野喜六著 研究社
 現代中国語文法 香坂順一著 光生館
 日本語のはたらき 羽根田寛司著 人間の科学社
 中国語と日本語 望月八十吉著 光生館
 現代英語の文法と語法 小西友七著 大修館書店
 朝鮮語のすすめ 渡辺吉鎔著 講談社現代新書
 Webster's New World Dictionary of the American Language. New York: World, 1952, 1970.
 Bradley, H. and S. Potter, The Making of English. London: Macmillan, 1904; Revised by S. Potter, 1968.
 Foster, B., The Changing English Language. London: Macmillan, 1968.
 Potter, S., Our Language. Harmondsworth: Penguin, 1961.

Summary

No language is quite free from the yoke of its syntax, sound systems and morphological restrictions. In other words, each language is more or less confined to its own linguistic framework which can roughly tell one language from another. Hence comes the so-called 'Englishness', 'Japaneseness', 'Chineseness', etc., etc.

In this connection, a comparative study of languages makes it easier to bring into relief the characteristics of each different language. Here special attention is paid to the comparison between English and Japanese. Needless to say, these two languages are in no way related to each other, linguistically. Hopefully, the gap between them will be bridged by Chinese.

What is 'Englishness' like? How different is it from 'Japaneseness'? Isn't there any similarity between English and Japanese at all? These questions are supposed to be taken up here, with 'Chineseness' involved, when necessary.

The first necessary mention between English and Japanese must be made of 'sentence structure'. The basic sentence structure of English is 'S+V+O', whereas that of Japanese is 'S+V' or 'S+C+V', though these grammatical terms (S, V, O, C) must be taken with a grain of salt between the two languages. This shows that English prefers transitive verbs to intransitive ones, whereas Japanese is the other way round.

In this case, 'S' signifies something to take action with, 'O' something for the action to be taken to. Japanese is not familiar with this construction of a sentence. Japanese does not usually take to this schema, 'S+V+O'. In Japanese, 'S' is not necessarily an actor. It is oftentimes what represents a situation. This reminds us of the so-called 'situation it' in English grammar. There may be some relationship between 'situational subject' in Japanese and 'situation it' in English. In any case, Japanese prefers intransitive verbs to transitive verbs because a subject word in

Japanese is basically not of an actor like in English.

Secondly, the flexibility of 'functional shift' must be mentioned of the parts of speech. English enjoys rather high frequency of 'functional shift' among the different parts of speech, whereas Japanese see no or little functional shift. The low frequency of functional shift in Japanese seems to have something to do with its overuse of particles, which is characteristic of the agglutinative language family to which Japanese also belongs. And this 'functional shift' is more often seen in Chinese than in Japanese, which is suggestive of the validity of the above hypothesis because Chinese, an isolating language, has basically no particles.

Thirdly, rhetorical mention must be made of 'word order' both in English and Japanese. English takes to 'loose order', where part of the sentence comes first, trifles last. On the other hand, Japanese takes to 'periodic order', where trifles comes first, part of the sentence at the ending.

Also, the lack of relative pronoun in Japanese really shows that Japanese is familiar not with 'loose order' but with 'periodic order'.

Since Japanese is a verb-centered language, the verb is put at the ending of each sentence according to its periodic order. In this case, the other elements of the sentence seem to modify the predicate verb as if they were all adverbial equivalents. Needless to say, in Japanese, the predicate is mostly composed of intransitive verbs.

Incidentally, in Japanese, almost all the adjectives or adjective equivalents, adjective phrases and clauses in attributive use precede the modified words (in most cases, nouns or noun equivalents), however long they may be. In English, some modifiers are put before the modifieds, and others put behind them. Generally speaking, adjectives seem to play a more important role in English than in Japanese, particularly the ones in their attributive use, perhaps the reason for which is that English is a noun-centered language, while Japanese is a verb-centered one.

Though belatedly, we must touch upon the difference in diction between English and Japanese. Diction and culture are two inseparable entities. In general, the English-speaking people prefer informality to formality in most cases, whereas the Japanese are just the other way round. A variety of highly sophisticated honorifics are found in Japanese, which the average Japanese must use correctly at the right time and in the right place, and to the right person. It is not always easy for even the Japanese to use those complicated honorifics correctly, particularly these days when people are getting more and more equality-minded, less and less appreciative of formality.

But in reality, the Japanese people in general still highly respect formality, which prevents them from expressing themselves as freely and straightforwardly as the English-speaking people do. It follows that the Japanese diction tends to be redundant, roundabout and lacking in the so-called one-word sentence, while the English-speaking people have developed such a straightforward, honorific-free phraseology as is seen in the one-word sentence. Naturally, there ought to be many

other differences unmentioned here between English and Japanese, particularly in the way of their vocal sides. The vocal side plays a far more important role in English than in Japanese, and for that matter, the Chinese language also depends on the vocal side far more than Japanese for better communication.

The Chinese lack of 'polite form' makes Chinese more dependent on its vocal side. The same is true of the English language. On the other hand, the relative less dependence on the vocal side of the Japanese language makes it more dependent on the polite form or its honorifics for sophisticated communication. This reminds us of the Korean language. Actually, no other language is more similar to Japanese than Korean. It has almost the same sentence structure as Japanese, with a variety of particles and honorifics as much in use as in Japanese. As a matter of fact, some linguists go the length of asserting cognate relations between Japanese and Korean. More mention of the Korean language would have made this essay a bit more persuasive to the reader, for a good knowledge of Korean will help us in having as deep an insight into our own language as that of Chinese and English.